
会員達のゲーム日誌

川代山女

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

会員達のゲーム日誌

【Nコード】

N9850X

【作者名】

川代山女

【あらすじ】

雪音はちよつと憤慨していた
何故私だけ能力が微妙なのか
その時、椿が持ってきたゲームによって転機が訪れる
これから起こる数多のイベント、そしてボス
雪音が主人公となって会員達と冒険に出かける

始まりと説明とゲームを（前書き）

その昔、とある友人が「雪音の能力微妙すぎない？」と行ってききました

その設定考えたのは私じゃないです元はと言えば貴方です

番外編だって意味はあります

というより本編より重要です

そして本編に反映されます

つまり……そうですねお楽しみですね

始まりと説明とゲームを

某月某日、データ実習室で雪音は愚痴を言っていた。

「どうして私だけバトルシーンが無いの？」

設定でも馬鹿力があると書いてあるのに

全く出てもこないのはおかしくない!？」

「だってその力使ったら学校が壊れるからだろ?」

波田子は設定資料を見ながらふと思ったように言った。

「いいね〜皆は派手な能力持っていてさ〜」

「でもアタシは死なないだけだけどな」

波田子の能力も地味な凄い能力である。

「あんたじゃなくて香苗とか椿、水城の能力」

「ああ、確かに……」

二人は少し気を落としていた。

「はあーあ、魔法とか魔術とか使えばいいのにな」

雪音が斜め上を見ながら言ったそのとき

扉が勢いよく開かれた。

「大変です!! 調理室にこんな物が!!」

扉を開いたのは椿だった。

その手には一世代前のハード、SANTENDO64を持っていた。

「こういう時は水城が出てきそうなんだけど、」

*第7部までに水城は扉から出ては来ません。

「そんなことよりもこの張り紙を見てください」

64に張られた紙にはこう書かれていた。

『貴女の願いをかなえるゲーム

”魔法と剣と銃のバトルもの”

クリアできたらお持ち帰り可』

「そしてソフトがこれです」

「ハ と ・ kとファ シ ス とを合わせたような

画だな」

色々ごちゃ混ぜになった画でこのゲームがどんなゲームなのか分からなかった。

「あ。箱の中に説明書があるよ」

雪音はゲームをやる前に説明書を読む派のようだ。

「ええと、『このゲームをやる人は

- ・身体が元気であること
- ・ある程度身体能力がいいこと
- ・どんな事があっても文句を言わない人

起動方法はソフトが入っている状態で電源を入れて下さい
操作方法は暫らくやっていれば慣れます

あらすじ

この世界は人族、亜人族達と少数の魔族と竜族が暮らしています。

それぞれの種族は戦争を繰り返していました。

しかし戦争は互いに被害しか残しませんでした。

その後、平和条約が結ばれ種族間で争うことは禁止されました。

しかしどうやら不穏な影が少しずつ動き始めたようです。
あなたはこの世界の住人となってこの謎を解き明かして

下さい

種族

・人族 繁栄能力に優れ、かなり大きな文明を築いている。
ごく稀に不思議な能力を持つ者が現れる

・亜人族 人族とは違う特徴を持つ人のことを言う。人族よりも生命力が強い。

・ 竜族 竜（龍）、竜人のことを言う、寿命が永く、戦闘能力が高い、繁栄能力が低い

・ 魔族 竜族と並ぶほどの力を持ち、その力で多くの種族を恐怖に陥れた。

・ 精霊 自然や物に宿る意思を持った魔力の塊、精霊によつては魔族と並ぶほどの力をもつ。

・ 動物 世界に偏在する生き物、亜人族達の祖先。

ゲームの目的

自由気ままに暮らすもよし、謎を解き明かすもよし、アイテムを集めるもよし

強さを求めるもよし、です。しかし謎を解き明かさないとゲームクリアにはなりません。

主な施設

・ 宿屋

体力や気力を回復する場所です。料理を食べることが出来ます。

・ アイテムショップ

薬や食料、本や武器、防具を買うことが出来る、中には非合法的な店もあるようで……

・ 銀行

お金を貸し借りできる所です。借金も出来ませんが借金がある状態ではクリアできません

闇金融もあり、金利が高いですが、多くのお金を借りれます。

借金が多くなると取り立てにやっけてきます。

・ギルド

それぞれの街や村などにある団体で、困っている人を助けてくれます。

ギルドに所属している人は殆どギルドの本拠地にいます。

・鍛冶屋

武器や防具を強化できる店です。強化でしか手に入らない物もあります

・料理店

料理の専門店で宿屋よりも少し高めですが大きな効果が得られます。

・病院

大病や死人を生き返らせることができます。薬も売ってくれます。

・港

お金を払って海や湖を渡ることが出来ます。船の中に店があるものもあります。

定期券あり

・駅

列車が停まる場所でお金を払う事によって遠くに行くこともできます。

定期券あり

武器

・近接武器

剣や槍などの近くにいる者に攻撃できる武器です。
多くの者が扱うことが出来る。
武器によっては効かない敵もいます。

剣

人型の種族が使う武器、

双剣や長剣、大剣などがあり大きくなるほど
威力、攻撃範囲が大きくなり、速度が下がります。
厚い鱗や鎧を纏っている敵には効きづらいです。

槍

全ての種族が使える武器

スピア系とランス系があり

両方ともあまり鱗や鎧の影響を受けません

スピア系は軽く、突きや薙ぐことも出来ます。

ランス系は重く、威力が高く、貫通して攻撃できます。

..... e c t

・銃器

拳銃やスナイパーなど精密な攻撃を行うことが出来ます。

人型の者が扱うことが出来ます

貫通効果の付く武器が多いです

武器によっては効かない敵もいます。

拳銃

軽く、連発して撃つことが出来ます。

しかし防御力の高い鱗や鎧には効きません。

スナイパー

長い銃身によって精密な攻撃が出来ます。
遠くから攻撃でき、当たり所によっては
防御力の高い敵にも大きなダメージを与えられます。

.....
e c t
.....

・魔術など

限られたものしか使うことが出来ません
しかし強大な威力を持っていたり、
回復なども出来る貴重な存在です。
全ての魔術に広い範囲効果が付き、貫通するものもある。
魔族や竜族、人族や亜人族の少数が使える。

呪文系と呪紋系などがあり、
呪文系は言葉にだして行い、詠唱が終わるまで発動し
ない。

ある程度の熟練者は無詠唱で発動できる。
呪紋系は紋様を描いて発動させる魔術、
呪文と違い描くため発動まで時間が掛かり、扱いが難
しい

熟練者は一瞬で描くことが出来る。

攻撃系

主に属性系が占めており、

基本系で炎 地 水 空の四大属性で、

応用系で金 木 闇 光が扱える

支援回復系

基本系は攻撃力強化、防御力強化、体力回復、気力

回復があり

応用系で敵の攻撃力低下、防御力低下、状態異常、光は敵味方を蘇生出来る。

- ・合成武器

機械槍や魔法剣、銃剣、迫撃槍といった複数の武器を合わせた武器です。

強化を重ねていくと鍛冶屋で行うことが出来ます。

魔法 などは魔術を扱えるものには合成できず、魔法の使用回数が決まっており、

使い終わったら魔術を使うことが出来る者に補充してもらわなければなりません。

しかし魔術を使えない人にも扱えます。

- 機械 などは

近接系の武器を最終強化していくとあるアイテムと合成できます。

普通の近接武器よりも強力で、鱗や鎧のある敵にもダメージを与えられます。

銃、銃 などは近接と遠距離系の武器を最終強化すると合成できます。

ほぼ全ての敵に対応できる武器ですが二つの武器を強化しないといけないので

かなりの費用がかかります。合成費用も安くはありません。

- アイテム

- ・回復薬

傷を治したり、気を安らげたり出来る薬、種類も

たくさんある。

・爆弾

設置したり、投げたりすることによって攻撃出来るアイテム

大きなダメージを与えられる。

・魔術紙

魔術が封じられた紙、魔術が使えないものにも使用できるがかなり高価、何枚も使うことにより魔法剣などを補充できる

使い終わるとただの羊紙になる。

・ただの羊紙

契約書などに使われる紙、魔術師は魔術紙を作ることが出来る。

・古い本

普通の本から魔術書まである。

買うまでどんな本なのか分からない。

e t c ……」

だって、

「長いですね……」

「説明書なんてそんなモンだろ？」

三人は長めの説明書を読んでようやく電源に手を掛けた。

「さてやってみるか」

波田子はテレビにコードを繋いだり、コンセントに差ししたりなど準備をしていた。

「準備できましたか？」

と椿が聞くと

「ああできたぜ」

と頭に埃を乗せて答えた。

そして波田子が電源に手を掛けたとき雪音が

「香苗と水城が来てないけどいいの？」

「来たら替わればいいだろ？」

早い者勝ちだから遅い方が悪いという考え方であった。これが三人のこれから起こる悲劇の始まりだった。

そして波田子が電源を入れると

テレビの画面にノイズが走り、

ザーという音と共に光り出した。

「目、目が、目がー！」「」

と三人はムスカ大佐のまねをしながら

これから起こる面倒くさい冒険を始めさせられるのであった

始まりと説明とゲームを（後書き）

設定がよく変わるのでそのまま放置してあり
矛盾があつたりするかもしれませんが許してください

私は家で寝てたいんです

布団に包まって至福の時を過ごしてたいんです

時間とやる気と詳細な設定を下さい

実在の人物をモチーフにしていると設定付け辛いんです

休日は布団に限りますね！

初めてのお使い もと、買い物（前書き）

年越しましたね

いい加減更新してと言われたので急いで終盤を書きました
眠いです

初めてのお使い もとい、買い物

光が消えるとある変化が起こっていた。

「あれ？データ実習室にいたはずなのに……」

周りの風景は街の風景になっていた。

「これって……」

「水城のせいだろうな」

三人は同じことを考えていた。

恐らくゲームの世界の中に入らされたのだろう。

多分、ゲームクリアしなければ帰れない。

三人は安易にゲームの電源を入れたのを後悔した。

「とりあえず情報を集めようぜ」

と波田子が言ったとき一枚の羊紙が波田子の前に飛んできた。

「なんか書かれてるな、」ステータスなどの見方などを忘れていたので書きます。

右にある、雑貨店に入ってアイテムポーチを買って下さい。そしてら説明します。『』

そして右を見ると小さな雑貨店があった。

「とりあえず入りましょう」

椿が扉を開くと中には黒目黒髪の12才ほどの少女がいた。

「いらつしやいませー。何をお探ですか？」

と言った。すかさず椿が、

「アイテムポーチを探しています。ありますか？」

「ありますよー。特別にタダであげちゃいます」

ゲームの様に流れよく進んでいった。

「ゲームってこんなものだよね」

「なんか味気ないな」

波田子と雪音はゲームの特徴である。

プログラムされていないことはしないという
流れ作業を体感した。

「使い方はその中にある辞典に調べたい人や物を入力すると情報が
出ますよ。」

アイテムポーチには最大50種類のアイテムを持つことが出来ま
す。

今は辞典が入っているので49種類入れられますよ」

「親切にありがとうございます。」

早速、パーティのステータスを見てみましょう」

雪音

・人族

・使用できる武器

双剣、長剣

長槍

手袋系

ピストル

長弓

本系

詠唱魔術

基本攻撃系

基本支援回復系

装備できる防具

軽、中量防具

装備

武器 なし

防具 制服

装飾品 なし

LV1

HP 400

基本攻撃力 150

基本防御力 43

特殊効果 基本ステータスが高い

椿

・人族

・使用できる武器
出来ない

装備できる防具

軽、中量防具

装備

武器 なし

防具 制服

装飾品 なし

LV1

HP 350

基本攻撃力 80

基本防御力 60

特殊効果 北斗神拳、ザ・ワールドによってほぼ最強

波田子

・亜人族

・使用できる武器

大剣

大槌

ロケラン

Gランチャー

長弓

装備できる防具

重量防具

装備

武器 なし

防具 なし

装飾品 なし

LV1

HP200

基本攻撃力 15

基本防御力 10

特殊効果 HP0になったあと次ターンで蘇生する。

「……アタシのステータス低っ!!」

「あ、まだ続いているみたいだよ」

水城

・人族

・使用できる武器

槍系

手袋系

本系

錬金術系不可

装備できる防具

軽、重量防具

装備

武器 なし

防具 店員服

装飾品 なし

LV1

HP80

基本攻撃力 10

基本防御力 8

特殊効果 酒系を飲むと死亡

「……」

「……ばれたみたいね」

「水城、何故ここに？」

「一応テストプレイも兼ねてやってみただけけれど

失敗してしまったの」

「だからちっちゃくて弱いのか」

波田子がステータスが低いことを聞くと

「雪音と椿が強いだよ。私と波田子のステータスが普通なのよ」

「水城って魔族のような感じがするけど今はそんな感じがしないね」

雪音がいつもの水城に感じる邪悪な雰囲気を感じられないことを言う
と

「ここに入ったときにお呪いと錬金術を失ってしまったの」

「それでそんな子供のような体型になっただんですか」
椿が腕組みをしながら大きな胸を持ち上げた。

「……不思議だね」

四人は同じことを口ずさんだ。

「とにかく武器と防具を買わないと……」

と雪音が言いながらアイテムポーチから所持金を見てみると
3万円が入っていた。

「これは普通の金額なの？」

「一応ね。基本的な武器と防具はそれだけで買えるわ」

「つまり、一人当たり3万円、最大50種類のアイテムが持てる訳
ですね」

「アイテムやお金の受け渡しは出来るのか？」

「出来るわ、だから一人が金欠になっても立替が出来るし、

アイテムがいっぱいでも他の人に持ってもらえるわ」

「意外と作りこんであるんだな」

「まあね」

そして四人は店を出てアイテムショップに入った。

「いらつしゃい。冷やかしだったらとつとと帰れよ」

「口が悪い店員だね」

「武器と防具はありますか？」

と椿が聞くと店員は左の方を指差した。

そこには剣や銃などが置いてあった。

続いて右を指差すとそこには

鉄の鎧と革の服が置いてあった。

ハンドナイフ×2

600円

刀

5000円

ラージソード

15000円

軍手

100円

アイアンハンマー

10000円

ナイトランス

10000円

拳銃

3500円

弓矢

7000円

アイアンメイル重量装備

12500円

スチールメイル中量装備

9800円

レザークライス軽量装備

7500円

と書かれていた

「どうしてアタシの装備できるのは高いんだ!!」

「まあまあ最大27500円なんだから大丈夫ですよ」

「なんで軍手が10000円なんだよ安すぎるだろ!!」

「とりあえず買いましょ。出なければ進まないわ」

そして雪音は刀とレザークライス

椿はレザークライス

波田子はラージソード、アイアンメイル

水城はナイトランスとアイアンメイルを買った。

「回復薬は……」

癒しの水一個 350ml 50円

スタミナドリンク 200ml 150円

尊酒シーマ 1000ml 10000円

神酒ネクター 350ml 5000円

鬼泣かせ 1000ml 2500円

色々あるね」

「酒系が多いのがちょっとな……」

「こっちは本系みたいですよ」

今日から魔法使い！（紙） 10000円

辞典追加ページ（紙） 500円

蘇生契約書（紙） 10000円

古本（書） 5000円

だそうです」

「追加ページは欲しいよな……」

「私は魔法使いを買っておいた方が良いよね？」

「そうね。それを買って使用すると使える魔術が増えるわ」

「装備できないの？」

「（書）が付いている物しか装備できないわね」

「なるほど」

そして雪音は癒しの水50個、スタミナドリンク20個、今日から魔法使い！を買って残金2000円

椿は癒しの水150個、スタミナドリンク20個、鬼泣かせ1瓶を買って残金9500円

波田子は辞典追加ページ買って残金2000円

水城も何も買わず残金？円

「水城、お金ないの？」

「ないって訳じゃないわ、ゲームを楽しくプレイするために、ね」

「……？」

いまいち意味が理解できなかったが考えても無駄なので考えないこ

とにした。

ゲームを進めるためには街の人に話しかけることから始まる。店を出て、最初に目に付いた人に話しかけることにした。

「何か、最近変わったことはないですか？」

と椿が周りからガチャと呼ばれそうな人に聞いた。

「変わったこと？そうだな〜ついこの間、ドリルのような髪形をした女の子が

街の外の森で何かやっているみたいだが……」

「そうなんですか、ありがとうございます」

椿は有力な情報を得た！！

念のためもう一度話しかけてみると

「ドリルヘアか、お嬢様キャラなんだろうな」

と言っていた。

「ドリルヘアの女の子か、心当たりがありそうなんだけど……」

「私もです」

「アタシも」

「……」

全員なんとなく予想がついた。

「街の外に出てみよっか」

雪音の発言に皆は賛同した。

街の外は鬱蒼としており、何が潜んでいるか分からない。

初めてのお使い もと、買い物（後書き）

もう伏字とか面倒くさいです

最初のボス戦　しかし　テンプル

周りを警戒しながら歩いていると

木の陰からゲル状の何かが出てきた。

「ライム？」

「辞典で見てください」

☐ スラム

ゲル状の何か

こつ見えても精霊。

LV 0

HP 12

攻撃力 2

防御力 1

☐

「精霊なのか、」

雪音は意外な事実に驚いていた。

皆が辞典の情報を見ている間に

波田子は手に持っている剣で斬ってしまった。

波田子はレベルが2になった。

波田子は精霊殺しの異名がついた。

「精霊殺し？何それ？」

その事を調べると

『精霊系の敵に多くのダメージを与えられるが

精霊系の敵に狙われ、加護が受けられなくなる』

・加護　魔術系の支援回復系による効果

「つまり、支援が受けられないと、」

「そう言うことみたいですね」

雪音と椿は波田子が面倒な目にあって大変だなと思った。

そんなこんなで波田子はス イムを切りまくり、
Lvが上がっていった。

しかし他の三人は自衛手段として襲ってくる蛇や野良犬などを倒して
Lvを上げていった。

暫らく森を歩いていくと小屋が見えてきた。

そつと様子を見ていると中では誰かが騒いでいるようだった。

「あの中にボスがいるんだね」

「おそらく、な」

だれもあの中にボスがいるなんていつていないのに勝手に想像して
いた。

静かに小屋の前に移動し扉を開けて見ると中には金髪の少女と男達
がたむろっていた。

「誰ですよ!？」

そう、この声には聞き覚えがあつた。

「やっぱり憐華さんでしたね」

その場にいた全員がやっぱりという顔をしていた。

「なぜ貴方達がここに？」

憐華は少し驚いていた。

まさか自分たち以外にこの世界に迷い込んでいる人がいると思つて
いなかったのだ。

「私達もどうしてこんなところにいるのか分からないんだけど」

「まあ、ここで合えたのも何かの縁ですし、

今日こそくたばつて貰いますわ!!」

「どうしてそうなるんだよ!!」

雪音と波田子は見事にハモつた。

そして憐華 + 下僕達 VS 雪音達の戦いは始まつた。

『チュートリアル 隊列

隊列を変更できるようになりました。

隊列を変えることによって敵の受ける攻撃を少なくしたり出来ま

す。

色々試して見て下さいね。』

今までは3 - 1で水城が後ろだったのだがこれで様々なフォーメーションが出来るようになった。

とりあえず隊列はそのまま様子を見ることにした。

『敵の情報 隊列2 - 1 - 1

前 下僕A Lv8装備なし 下僕B Lv8装備なし

中 下僕C Lv10装備短剣

後 憐華 Lv12装備ハンドガン、機関銃』

「どついつ風に攻めたらいい？」

雪音は水城に聞いてみたが

「そうね……私はじっくり長く責められたいわね」

と的はずれなことを言っていた。

「アタシが考えてやる。」

アタシ達が持っている武器じゃあ

後ろにいる奴らは攻撃できないだろう。

だから前にいる奴らを倒すしかない」

「さらに憐華さんは銃を持っているから私達を攻撃できるんですね」

「そうだ」

「なるほど、波田子にしてはまともな事を言うじゃない」

「一言余計だ」

唯一の救いとしては下僕Cは前の二人が倒されるまで攻撃できないということだ。

そして戦いは始まった。

下僕達は外にいる雑魚敵よりも強く、簡単には倒れなかったが、雪音と椿のチート気味な初期ステータスには敵わなかった。

「キー！！目障りですわ！！私が直々に相手して差し上げます！！」

少し切れ気味の憐華は機関銃に持ち替え最前列に来た。

「オホホホ、攻撃させませんわ！！」

憐華は機関銃で乱射し雪音達を近づけさせなかった。

「くっ！近づけない」

流石に雪音たちもあれをまともに喰らっては無事にはすまないだろう。

雪音がどうしようか考えているとき、波田子が立ち上がって

「アタシに任せろ！！」

と言い残し機関銃の盾となってくれた。

雪音は波田子に感謝しながら憐華の後ろに回り峰打ちで憐華に斬りかかった。

「クハッ！！一撃でこの威力……チートですわ」

憐華は膝から崩れ落ちると地面に倒れこんでしまった。

その拍子にハンドガンと機関銃が憐華の懐から出てきた。

「これがドロップアイテムか……」

雪音が二つともアイテムポーチの中に入れ、

皆で歓喜の声をあげた。

「やったぜ、ボスを倒した！！」

「やりましたね」

「いやー大変だったね」

と皆で喜んでいるとき後ろから水城が、

「雪音。あなたは魔術を使えるから後ろの二人を攻撃できたわよ」

「……そう言うことは早く言って欲しかったな」

と過ぎたことを言っていた。

その時、倒したはずの憐華が立ち上がり、

「今回は負けましたけど、次に会ったときは勝ってみせますわ！！」

と捨て台詞を残し、小屋から出て行った。

「面白くなってきそうだけ」

波田子はこのゲームを楽しんでいるようだった。

2 戦目 なんと 速い事が 前編

小屋をでて街に戻ってみると街の中はモンスター達でいっぱいだった。

ボスの情報をくれたあの人に話を聞いてみると

「誰かが街を守っていた固有結界を壊したみたいだね。

モンスターたちが街に侵入してきたんだよ」

「どうしたらモンスターは出て行ってくれますか？」

と椿は続けて聞くと、

「まず最初に結界を直さないとモンスターは限りなくやってくると思う。」

街に結界を張れる人はそんなにいないと思うから頑張って探してみてもいい情報を探してきてくれた。

またもやいい情報を教えてくれた。いる場所は流石に知らないらしく、他の人に聞いてみることにした。ちよつと太り気味の関口という人に聞いてみると

「結界を張れる奴がこの街にいるんならとっくにやっているだろうよ。」

ここから東に行った先に古城がある。そこにいる奴に頼んでみるな」

と教えてくれた。

「ありがとうございます」

そして街の外に出たとき

水城が

「私はちよつとやる事が出来たから外れるわ」

といい西の方に消えてしまった。

「やることって、いいことがないような気がする」

「そんなことよりチビ状態で大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよ。きっと」

ここから先は少し飛ばします。
という訳で古城に着いた。

『幽霊古城

始まりの街が出来始めた頃、

この城の周りは様々な人が住んでいた。

しかし、魔族との戦いで城下街の人たちは死に絶え、

城の中にいる全ての人は封印されてしまった

今も城の中には幽霊が住んでいるという。』

「幽霊がいるの？」

雪音は震えていた。

「そしてみたいですね」

「香苗がいたら絶対に嫌がっていただろうな」

「そういえば香苗は何処にいるのかな？」

「さあ？」

ひそかに何かのフラグが立つのであった。

城の中は幽霊達と悪霊に取り憑かれた動物達がいた。

「襲ってくる動物は何とか倒せるけど、幽霊は攻撃が当たらないんだだけ〜」

雪音は刀を振り回しながら進んでいた。

「テメツ！！当たってる！！痛え！！」

たまに波田子に当たっていたようだ。

雪音が振り回す刀に気をつけながら進んでいくと、綺麗なままのドアにたどり着いた。

「どうしてここだけ綺麗なんでしょう？」

「もしかしたらここに結界を張れる人が……」

緊張しつつ部屋に入ってみるとそこにはブロンズヘアの女性がいた。

碧色の瞳はどこか神秘的でその目は透き通っていた、というより

体全体が透き通っていた。

「＃\$&mp;%`&mp;`、`、`（`<ギアアアア！！」
雪音はもう耐えられなかった。
どさっ。

倒れこんでしまった。

「お客さんかしら？珍しい」

「ちよつと用事がありました、

貴女は誰ですか？」

「私？私はね結界士だったの」

「「だった？」」

「ええ、昔この城と城下町の結界を張っていたの。

ここから東にある町の結界も私が担当したの。

でも、魔族が攻め込んできたときに私は結界ごと封印されてしまっ
こうなつてしまったの」

「結界ごと？」

「はい。それほど強力な封印だった」

「魔族は強大な力を持っている。か」

波田子は何かを考えているようだった。

「あのー申し訳ないんですが東にある街の結界が破られてしまっ
たのですが」

「お願いできないでしょうか」

と椿は失礼を承知で聞いた。

「結界が破られた？魔族の仕業かしら？」

「それは分かりません。しかし街の人たちが困っているんです。

助けてもらえませんか？」

「私はここを出られません。しかしこの力を一時的に渡すことが出
来ます。」

「この中に魔術が使える人はいませんか？」

「そこで倒れている奴なら使えるが……」

「そうですね、分かりました」

「やってくれるのか？」

「でも、私のお願いをきいてもらえますか」

「お願い？」

「はい。この城の奥に、貴女達以外に誰がいるようです。

その人を追い出してくれませんか？」

「嫌なのか？」

「なにか嫌な雰囲気があるんです。私を冥界に連れて行くようなそんな気がするんです」

幽霊になった結界士は怖がっていた。

「分かりました。私たちが何とかしましょう」

そして椿と波田子、気絶した雪音は部屋から出た。

「雪音！！お、き、ろ！！」

「お化け怖いお化け怖い」

「いい加減に目を覚ませ！！」

「はっ！！ここは？」

目を覚ました雪音はふらつきながらも

状況を説明してもらい城の奥へと進んでいった。

歩いて10分がたった頃巨大な扉の前にたどり着いた。

「逃がしませんよ……」

香苗は怨霊の手を波田子に伸ばした。

「くっ、逃げられない!!」

波田子は避けられず捕まってしまった。

波田子を見る見る生気を吸い取られていった。

「気をつけてください!!」

椿がすかさず怨霊の手首に蹴りを放った。

前のようにはいかないように椿は続けて時を止めた。

その瞬間椿は香苗との距離をつめた。

そして回し蹴りをしようとしたとき、あの危機感が椿は感じた。

「まさか!?!」

急いで一步下がると次の瞬間椿がいた所は黒い斬撃があった。

「やっぱり効きませんか……」

「何が起きた!?!」

げっそりした波田子の呼びかけに椿は振り返り、

「一筋縄では行かないって事です!!」

と言いもとの視線に戻すと白い何かが顔の目の前に来ていた。

「これは!?!」

練乳だった。

椿は見事にクリーンヒットし気力が下げられた。

「気力を回復しないとヤバイかも」

雪音は魔術で注意を引き二人に元氣ドリンクを飲む時間を与えた。

「危なかった……」

「香苗と手にはかり気を使っていると佐藤さんの攻撃が来る。

いざ敵になってみると大変だね」

どうにかしてこれを打開する方法はないのか、

このままでは全員は香苗に倒されてしまう。

もう駄目かもしれないと思ったその時、

椿はアイテムの鬼泣かせを振りまいた。

かかった怨霊の手達は動きが止まった。

香苗と佐藤さんも苦しんでいた。

「もしかして、椿はあの二人が悪霊に取り憑かれてるって知っていたのか？」

「途中までは分かりませんでした。でも佐藤さんがいるのにヤンデレモードになってるのはおかしいと思ひまして、」

椿の判断によってどうにか動きを止められたが

悪霊を離さないと二人を助けられない。

その時、香苗に変化が起きた。

苦しみのあまり菊一門を離れた事によりヤンデレモードが解除されたのだ。

ヤンデレモードが解除されたところでここから先はどうにもするこ
とが出来ない。

三人が頭を悩ませていると先ほどの結界土が現れた。

「（、、）<ギアアアア……」

雪音はまた気絶しそうになったが、頑張つて堪えた。

「冥界の力がなくなったようですね」

そう言うとき結界土は香苗と佐藤さんに除霊を掛けた。

「除霊が出来たんですか」

「はい。幽霊の私が出るのもおかしいですが」

香苗と佐藤さんは力が抜けたように倒れた。

「私のお願いを聞いてくれて有難うございます。

貴方に力を授けましょう」

そう言うとき結界土は雪音に触れ、力を授けた。

「お化け怖い！！！！」ついに雪音は気絶してしまった。

「私もここを旅立てそうです」

この言葉を最後に結界土は消えてしまった。

『雪音は一度だけ結界を張れるようになった！

雪音は除霊術を使えるようになった。』

香苗と佐藤さんが仲間になった。』

『チュートリアル サイズ

仲間の中にはMサイズとLサイズというものがあります。

これらは一人分と計算されますが隊列で設定するとき

Mサイズは二人置ける場所にしか置けなく

Lサイズは三人置ける場所にしか置けません、

M・Lサイズの横に人を置くことは出来ませぬ。

しかし、Lサイズの仲間を二人以上横に設定は出来ませぬし、

二人横に置けるとともにMサイズの仲間を2人置くことは出来ませ

ぬし、

三人横に置けるとともにMサイズの仲間を3人置くことは出来ませ

ぬ。

「うづ……ここは？」

「香苗！佐藤さん！大丈夫？」

「なんか嫌なことを思い出していたぬ」

「寝覚めが悪いな……」

二人は無事だった。

無事を確かめると、みんなはその場で休憩をした。

「香苗、どうやってここに来たの？」

「分からないぬ。佐藤さんと散歩していたら空が暗くなって、

気付いたらみんながいたぬ」

「確かにそうだった」

佐藤さんも頷いた。

この世界にはおかしなところがある。

電源を付けたのは雪音、椿、波田子の三人だけだった。

しかし、水城、憐華、香苗、佐藤さんとその場にいなかった人たちが

いる。

一体こんなものを作ったのは誰なのか、不思議なことが多すぎる

五人は始まりの街にもどり、結界を張ると、

モンスターたちは蜘蛛の子を散らしたように去っていった。

「なんとかひと段落ついたあ」

ふらふらと街の中心まで歩き

五人は宿屋でゆっくりと休んだ。

朝になり街の活気は以前と同じように賑やかになっていた。

「はぁー、よく寝たー」

雪音はのびをして眠気を飛ばした。

すると街の人がやってきて

「君達のおかげで街は救われたよ」

「どう、いたしまして……」

いきなり言われたので驚いた。

「ここから西に行った機械都市で祭りをやっているんだ。息抜きに

どうだい？」

「お祭りですか、楽しそうですね」

「ここから西つて……」

「気になるな」

NPCならではの一方的な発言を聞き流し、

雪音と佐藤さんは考え込んでいた。

NPCの男の人が去り際に

「大きな河に掛かる橋を渡ったあと、大きな時計塔があるそれが目

印だ」

と行って消えた。

「行かないと先には進めないよね」

「うむ」

「忙しいな」

「ああ」

愚痴を言いながらも真っ直ぐ機械都市へと向かっていった。

鐘鳴り響く 機械仕掛けの塔

機械都市につくとそこら中に

『時計塔の頂上にたどり着いたら特別賞品!!』
という貼り紙があった。

シナリオを進めるため祭りに参加することになった。
受付を済ますと一通り説明を聞いた。

『この祭りは1パーティごとによってもらいます。』

時計塔の頂上にある鐘を鳴らすことが出来たら全員に商品を差し
上げます。』

周りの人に聞いてみると鐘を鳴らすことが出来た人はいないと言う。

・
・
・
・
・

何とか時計塔の頂上にある大部屋に入り、鐘のある階段を上ろうと
したとき

後ろから足音が聞こえてきた。

「順調に進んでいるようね」

「「水城!!」」

古城に行くときに別れた水城がここにいると言うことはここで何か
をする予定だった。と言うことになる。

「水城今まで何をしていたの？」

「待て!! 姉御に近づくな!!」

その瞬間水城は重槍を雪音に突きつけた。

「な、なにを……」

「おかしいと思ったんだ、1パーティしか入れないはずなのに姉御の気配がした」

「どういう事なんだぬ？」

「つまりこのボスは姉御だっていうことだ……」

「察しがいいわね。流石、と言うところかしら」

「何かしらの目的があるんだろ？」

「そうね。隠しても意味がないから言うわね。」

雪音。貴女は何を思っこのゲームを点けたのかしら？」

「魔術を使って見たい。だよ」

「そう、実際貴女は魔術を使っている。」

そしてこのゲームは貴女の願いを叶えることが出来るゲーム。

でも簡単に魔術を持ち帰らせる訳には行かないの」

「どういう事？」

「『強大な力を使う人の気持ちで救い、滅びどちらにでもなる。』

つまり、貴女が魔術を使うに値するか決めたいのよ。

このゲームの製作者の一人として、友人として、

貴方達の覚悟と信念を私にぶつけて見なさい!!」

『敵の情報 1 - 0 - 0』

前 水城Lv36 装備ドリルランス

中 なし

後 なし』

「チビ状態とはいえ簡単には倒せないだろうな」

「うむ、防御力が高そうぬ」

「遠距離からなら大丈夫!!」

雪音は炎球の魔術を放ち、

水城の攻撃範囲外から削ると言う戦法をとった。

炎が水城に当たり、周りを焼き尽くした。

「遠距離攻撃の出来ない水城はただの女の子よ!!」

雪音がいつもの恨みを晴らし、小さくガッツポーズをしたとき、

炎が突然掻き消えた。

「!?!?!?!」

「!?!?!?!」

佐藤さん以外は驚いた。

消えそうな炎の中からゆっくりと水城が出てきた。

「確かに強くなったわ。今の貴女なら私だって倒せるでしょう。

……でもまだ足りない」

「何が足りない!?!」

波田子が大剣を思い切り振る。

大剣は威力が高く、殆どガード越しにダメージを与えられる。

しかし、それは相手が受け止めることが出来ない場合に限る。

「貴方にびつたり武器ね。でも……足りない」

水城は機械重槍で大剣を止めていた。

「後ろがから空きですよ!?!」

椿が後ろから拳で攻撃した。

すかさず水城は振り返り手で止めた。

はずだった。

「流石、椿……。分かっているみたいね」

水城は椿の拳を止めたはずなのにダメージを受けている。

「攻撃力なら私のほうが高いはずなのに……」

雪ねは顔を曇らせ、刀で斬りかかる。

しかし、水城は動こうとしない。

雪音は慌てて直前で刀を止めた。

「どうして動かないの……?」

雪音は刀を握り締め。水城に問うた。

「……まだ早かったかしら……?」

水城は少し俯いた。

「覚悟が足りない」

後ろで見ていた佐藤さんが呟いた。

「え?」

「水城は自分を本気で倒す気で来いと言っているんだぬ。」

「覚悟を見せると」

香苗も一緒に後ろの方でみていた。

「雪音と波田子以外は分かっているみたいね」

「倒す気で攻撃してるよ？」

「ああ」

「心の奥底では怖れている。だから芯のある攻撃が出来ないのよ」
水城は槍を振り、衝撃波を放った。

「くっ!!」

雪音をはじめ、椿、波田子が飛ばされた。

「このままでは貴女達の旅はここで終わってしまっわよ？」
槍を掲げると槍は高速回転をし始めた。

「こ、これが機械重槍の真の姿!？」

雪音は半歩下がり息を呑んだ。

次の瞬間、水城は消え、

気付くと前にいた波田子は腹を貫かれ、あと10cmで雪音にも当たっているところだった。

「グハア!!」

「波田子!!」

次第に回転は遅くなっていき、止まった。

「波田子の鎧を貫くなんて……」

雪音はもし半歩下がっていなかったら、と思うと
めまいがした。

「次は貴女よ？」

槍に刺さった波田子を振り飛ばすと、雪音に槍を向けた。

「やだ……死にたくない……」

雪音は目を瞑る。

「デレてもだめよ」

金属の擦れる不快な音を出しながら槍は回転する。

「雪音……貴女なら殺してくれると思ったのだけれど……」
槍を構え、水城は力強く踏み込んだ。

「いやだああああ!!!」

炎の魔術を使い、刀を突き出して止めようとしたが遅かった。火花が散り、二人を覆った。

雪音が槍に貫かれたかに思われた。

が、槍は地面に転がっていた。

波田子が水城の、槍を持つている右腕ごと切断したのだ。

雪音はゆっくり目を開けると、そこには炎を纏った刀がのどに刺さった水城の姿があった。

「こ……でい……の……」

かすれた声で崩れ落ちる水城、

その顔は笑っていた。

「水城!!!」

雪音は炎を消そうとした。だが消えない。

「あな……の覚……は……け取……わ。」

あ……たは……術を……かう資格……る」

「もう喋らないで!!!」

「でも、この……最後には……いる。」

本……ら行か………無かった

心してゴホツ……進みなさい……」

そこまで言つと水城の身体からたくさん白い光がでてきた。

少しずつ身体が薄くなっていき、最後には1つの光だけ残して消えてしまった。

消える直前に何か言っていたような気がするがよくは聞き取れなかった

最後の光が雪音の持つ刀に触れると刀に紋様が浮き出た。

「これは？」

『刀が【覇刀 風水火山】になった。』

「刀が進化した!？」

常軌を逸した進化、それは水城の最後のプレゼントだった。

「最後の言葉が気になりますね」

「何て言っただんだぬ？」

「わからねえが「何とかシン」って言っただな……」

「まだまだこれからってことだ」

波田子が剣をしまつとあたりを見渡した。

「何を探しているの？」

「いや、水城の武器が落ちていないかなって」

「そついえば無いね」

「一緒に消えてしまっただんでしょうか？」

「あつー！」

「香苗、あつた！？」

「この塔にきた目的を忘れていたぬ」

全員忘れていたが、塔の最上階にある鐘を鳴らしに来たのだった。

全員急いで最上階に上がり、鐘を鳴らした。

「やった〜時計塔クリア！」

「ああ」

皆はとりあえずは目の前の難関を突破し、喜んだ。

暫らくし、時計塔を降り、受付会場へ戻った。

「クリアおめでとございます。これが賞品です」

それは船のチケットだった。

「この近くに流れる河を降りていくと港町があります。」

そこにある船のチケットです」

チケットにはファーストクラスと書かれていた。

「ファーストクラス……初めてだよ」

「あまり縁がありませんからね……」

「はははは……」

その日はお祭り騒ぎだった。

一方時計塔最上階では……

《うんうん、大分シナリオ通りに進んでいるね。あれに辿り着くまで時間の問題だね》

建物の影に隠れ、声によって男だと分かるがそれ以外は全く分から

ない。

《君はどう思う?》

男の視線の先には月明かりに照らされた双黒を宿す者が立っていた。顔に布を簡単に巻きつけてあり正確に確認することが出来ない、

《……。安心するのはまだ早い》

強風の中でも布は取れずたなびくだけだった

《水城も使命を果たしたからねーそろそろ僕たちも動こうか》

《そう、だな……ああ、その前に……》

双黒の者は水城が持っていた槍を拾う

そして二人は月が雲に陰ると共に闇に消えていった。

巡り会う 二人の 獣人

一夜あけ、五人は朝まで騒いでいた。

「すっかり寝不足だよ」

「うむ、目の下にはクマがいるぬ」

寝不足の所為でなかなか出発できないでいた。

仕方なく宿屋でもう一眠りしようと思つてお金を払っているときだった。

「ねえねえ、おねえさんたちってちけつともらったひとたちだよね？」

突然話しかけてきたのは茶髪の幼女だった。

「そうだよ。お姉さん達に用があるの？」

「うん。あのね。ぱるね、みなとまちにいきたいの」

幼女の名前はパルというらしい。

「パルちゃんは港町に行きたいんだね」

「うん！ぱるひとりだとこわくていけないの」

「うんうん。可愛いよお〜」

雪音は頭をなでなですると嬉しそうに笑った。

そのとき雪音は髪の毛のふっさふさでこの娘が獣人だと見抜いた。

それ以前に犬耳がついていたのでみれば分かったはずだ。

「でもお姉さん達は眠いからちよつと待っててね」

「うん」

雪音達はぐっすり寝ている頃、佐藤さんはパルと話していた。

「パル、と言ったな。お嬢ちゃん」

「なあに？うさぎさん」

「お嬢ちゃんはNPCじゃねえな」

「ねぬぴーしー？なあにそれ？」

「そうか、わからねえか」

「ななおねえちゃんならしってるかもー」

「お姉ちゃんがいるのかい？」

「うん！！ぱるとおんなじみみがついてるの！！」

パルは耳を手で動かした。

「二人姉妹なんだな」

佐藤さんは顎をなでながら見ていた。

「ん〜ん。あとておおにいちゃんとうるおねえちゃんがいるの」

「ほう。沢山いるな」

「でもねでもね、おにいちゃんはねこさんのみみでおねえちゃんはうさぎさんのみみの」

「血が繋がってないのか？」

「おかーさんにひろわれたからいっばいいるの」

「そうなのか」

話は良く進んだ。

其の内に雪音たちは一眠りして疲れを取った。

「さて、出発するかー」

雪音は伸びをした。

「えっと、河を下っていけばいいんだね」

「そうですね。町もそれほど遠くなさそうですね、今日中につきそうです」

しかし、そろそろアイテムも尽きそうですねので出る前に立ち寄った。

「もうちょっと待っててね」

「うん！！」

アイテムショップの商品は武器が多かった。

「機械都市だからね。仕方ない」

「なにこの鉄の塊？」

「多分それは機械武器を作るためのアイテムですよ」

「100万つて高！！」

小さな物なら10万だったがそれでも高いことには変わりなかった。

「チエーンソーがあるぬ……」

香苗は目を光らせながら眺めていた。

「どうせ買えないんだから欲しい物だけ買っで行こう」

波田子は生命の粉塵を沢山買ってスツカラカンになっていた。

「にしてもこのゲームお金が貯まらない…」

「敵が落とす換金アイテムを売ってお金を貯めるしかないですもんね」

「廃人武器を作るのに幾ら必要なんだよー」

「考えるのは諦めよう。作れないから」

結局回復アイテムを買っただけで終わった。

気分を刷新し河原へと進んだ。

「さて行きますか」

そして南へ進んだ。

その途中で遭う敵は機械で出来たものが多かった。

「機械都市の近くだからかぬ？」

「そんなことはどうでもいいよ！！防御力高過ぎ！！」

波田子は懸命に大剣を振るが、

鋼鉄で出来ているので雑魚的でもなかなか倒れない。

「そうですか？」

椿と雪音はその攻撃力で簡単に壊していた。

「…ハンパネエ」

絶句だった。

壊れた敵が落とすアイテムは銀や銅だったので換金アイテムが見る見るたまっていった。

「お金集めに最適だね」

換金アイテムを集めていると前方から大きな何かが近づいてきた。

「あれは…何？」

「でかいロボットだな」

佐藤さんはにやけていた。

「笑っている場合じゃない！！」

アクションゲームで出てきそうな人型のロボットだった。

「でもいいアイテムを落としそうですよ」

ロボットはミサイルを発射し攻撃してきた。

「この覇刀を使う時が来たみたいね」

雪音は刀を降ると紋様が浮き出て

空の魔術が放たれた。

斬撃はかまいたちとなつてミサイルを両断した。

「すご……」

波田子は口が閉まらなくなった。

「まだまだ！！」

次に雪音は構えると刀が炎を纏った。

そしてロボットに向け炎を纏ったかまいたちを撃った。

火と空の高度な合わせ技である。

ロボットに直撃したが全く効いていなかった。

「効いてない！？」

「障壁でもあるんでしょうか？」

「打撃しか駄目ってことか」

佐藤さんは香苗に抱かれて眺めていた。

「分かりました」

椿は頷くとロボットの足に蹴りを食らわした。

ロボットは凄い衝撃に耐えられず足を取られ倒れてしまった。

「終わりです！！」

そしてロボットの腹に空中からの踵落としを放った。

暫らくの沈黙が続く、

決まったかに思ったが、ロボットは凹んだだけで

まだ動いていた。

「さすが大きいだけありますね……」

続けて百烈拳を出すが

効果的なダメージは与えられなかった。

「いい加減倒れて下さい！！」

最後に頭に回し蹴りをする、何か壊れる音がした。

ロボットの動きが遅くなった。

「今です!!」

椿が雪音に知らせた。

雪音はそれを聞くともう一度、炎の斬撃を放った。

「今度こそ!!」

ロボットは障壁が破れ防ぐことが出来ない。

そしてロボットは上半身と下半身が分かれた。

機械的な音を出して小さな爆発を起こした。

壊れたロボットは動かなくなった。

「これ全部アイテム？」

壊れた腕やら脚やらあったがガラクタでしかなかった。

その中で唯一使えそうなのは心臓部のモーターだけだった。

「これってアイテムシヨップにあったモーターと一緒にじゃない？」

「っぽいですね」

「これだけでも持つていくか」

「これでチェンソー作るんだぬ!!」

香苗は嬉しそうにロボットごとポーチに入れて持つていった。

「アイテムポーチすげー…」

どんなに大きいものでも入ってしまう。

そのあと出てくる敵は魚に脚が生えたようなグロイ敵しか出てこなくなつた。

「港町が近いから？」

「さあ？」

ドロップアイテムも魚の骨など微妙なものになった。

魚の骨の量が3桁に達しようとしたとき町が見えてきた。

「やっと着きましたよ」

「魚臭くなつたけどな」

そして夕暮れ前に港町に着いた。

「ついたついたー」

パルは嬉しそうに飛び跳ねた。

「パルちゃんはここに何しに来たの？」

「ななおねえちゃんにあいにきたの」

「先に行こっか」

「わーいわーい！」

パルは走り出した。

「そんなに走ると転ぶよ！」

「だいじょーぶ」

パルは脚がもつれ、

言っただそばから転んだ。

「あいたたた…ころんじゃった」

「だから言っただのに」

雪音が駆け足で近づくとサフラン色をした女性がパルを立たせていた。

「あらあら。大丈夫？」

「ななおねえちゃん！！」

那奈という獣人はどこかパルと似ていた。

「一人で来たの？」

「ん〜ん。あそこにいるおねえさんたちときたの」

雪音は二人のところに着いた。

「パルをここまで連れてきてくれてありがとうございます」

「いえ、目的地が一緒だったので」

「謙虚なんですね」

那奈は雪音達と同じような歳に見えたが言葉遣いが大人びていた。

「早いよー」

香苗、佐藤さん、椿、波田子はあとからやってきた。

「あら？貴方達は……」

那奈は皆の方を見ると驚いたような顔をした。

「俺達に何か？」

「いえ…なんでもありません。

何かお礼をしないといけませんね」

そういうと那奈は懐から何かを取り出した。

「それは？」

雪音は那奈の手のひらに乗っている物を注視した。

「これは私たちの力の欠片です」

「力の欠片？」

みんなして頭の上に？が出てきそうだった。

「私たちはこの世界の住人ではありません。

貴方達のいる世界に住む者です」

「つまりNPCじゃないと」

佐藤さんは分かっているような顔をした。

「分かっていたのですね」

「なんとなくな」

「やはりこれは貴方にふさわしい」

那奈は佐藤さんに欠片を渡した。

那奈は少し考えるような素振りをみせた。

(おかしい……私を知っていてもいいはずなのに)

彼女らが世界に来た時間と

「ではそろそろ私たちは行きます」

「ああ、気をつけてな」

「はい」

那奈とパルは町の中心部へと消えていった。

海渡る 美味しい 怪物

「私達もそろそろ行こうか」

沈黙が訪れた後、5人はアイテムを換金しに行った。

銀や銅は港町では高く売れた。

壊れたロボットはどうなったかと言うと

鍛冶屋の人が武器へ加工してくれた。

「チエーンソー！！チエーンソー！！」

香苗は喜んでいた。

「物騒な物がすきなんだね…」

一人当たりの所持金が10万に達し

全員にやけていた。

「思ったより高く売れましたね」

「これで暫らくは豪勢な物が買えるね」

「船の中ではすぐに消えそうだけど」

波田子は右を見ながら呟いた。

「船が見えてきましたよ」

「大きい…」

見た目が豪華で、

エリザベス号のような感じがした。

「チケットを拝見します」

「あ、お願いします」

船員は雪音からチケットを受け取ると
人数分ある事を確認した。

「ようこそ、船のたびへ」

船員は微笑みながら礼をした。

雪音たちは船の中へと入っていくのだった。

「船の中も凄いね…」

「そうですね。紅い絨毯つて高級な感じがしますしね」
雪音と椿は船の豪華さに関心をもっていたが、
他の人たちは他の事に興味を持っていた。

「豪華客船だから、いい料理が出てくるんだろうな」
食事のことに興味を持つ波田子、
香苗と佐藤さんは…自分達の世界にいた。

そんな空気が食事の時間まで続いた。

「ほー、中華料理からフランス料理まであるよ」

「豪華客船ですからね」

他にもラーメンや回転すし等もあったが、高級料理しか目に入っていなかったようだ。

それぞれが自分の食べたいものところに行き、
食事を満喫しているときだった。

突然船が揺れた。

「えっ！？何？何！？」

雪音が驚いて、フカヒレを床に落としてしまった。

「冰山にぶつかったのかぬ？」

「いや、温暖な気候だからそれは無いんじゃないか？」

香苗と佐藤さんはそんなのほんとした会話をしていた。

「こういう時は海の怪物がでてくる展開なんだろうな」

波田子はゲームの展開を読んでいた。

急いで外に出てみると

そこには案の定、怪物がいた。

「これってタコ？」

「クラーケン、だぬ」

もし、これがあれなゲームだったら

あるフラグが立つのだが、流石によくないのでやめておく。

クラーケンはそのうねうねとした手で船を揺らす

「oi、bakaやめ！吐くから！うゝおゝえゝええゝ」

「目の毒だぬ……」

「波田子吐くの早すぎ！」

他の全員も貰いゲロをしまいそうだったがとりあえず波田子を海に落とす

ゲロごとを見ないことにした

「とにかくあいつをなんとかしなきゃいけないわね……」

「こつこつ敵って打撃が効きにくいとかありますよね」

「まあこの世界ゲームだし、あるかもしれねえな」

じゃあ剣撃だと言ふ事で雪音が試しに斬りつけてみると

「ぎにゃー」

なんとも間の抜けた声を発した

「これ効いてるの？」

「かわいい鳴き声だぬ」

「猫みたいだな」

「おう、ブス相変わらず戻るの早いな」

「余計なお世話だつての」

波田子の服はビッショビッショで体に服がくっついていて色気がある
だがこの中に男はいないので特にドキドキする奴などいなかった

「困りましたね」

「困ったぬ」

「そつだね」

「ああ」

「お前ら攻撃効かないからって途方に暮れてんなよ！
弱気になってる会員達に波田子が叱咤する

自分たちが敵わない敵など今まで見たことが無かったから
こつこつ時に何をすればいいのか分からないのだろう

「いや、困つてんのは攻撃が効かないからじゃなくてアンタのその
恰好」

「非常に言いにくいのですが見てられない格好です」

「目が潰れるからとにかく中に入っていて欲しいぬ」

「死ねとは言わんが邪魔だから消えてくれ」

「……」

波田子はとぼとぼと船内へと入っていった

「じゃあ終わらせませるか」

「椿頑張って〜」

「何でこんなに（更新が）延びていたんだ？」

「えっと、『正直どう扱っていいのか分からなかったし、USBメモ」

リがどっかいった』だそうだぬ」

『10か月ぶりにこの続きを書くことになりましたね』

「そんなメタは要らねえよ!!!」

波田子の叫びはクラーケンが海へと沈む音に消えて行った

灰被る 温泉街の 幻

波田子の服も乾く頃船旅も終わりを告げる

「たこ焼き美味しかったですね」

「外はカリつと中はふつくら、ソースとマヨネーズの相性は抜群だったね」

「化蛸でも蛸には蛸なんだぬ」

「なんかたこ焼き作りたくなってきました」

「だからお前はなんで出てきてんだよ！」

「え？お呼びでない？」

「波田子誰と話してんの？」

「何だよアタイ痛い人みたいじゃねえかよ！」

「叫ぶな騒がしい」

「（・・・）」

「顔文字も気持ち悪いぬ」

「とにかく作者が出てくると白けるからやめてくれだそうだ」

特に面白い展開もなく港へとたどり着く

この港町は温泉街で日々観光客が出入りしている

「温泉街ですかー温泉に入ってみたいとも思いませんか？」

「どうしようかな？」

「まあ折角だし入ろうぜ」

「てか、佐藤さん人形じゃないのか」

「佐藤さんは人形じゃないぬ、兎さんだぬ」

（濡れるだろ絶対）

「俺をそんじょ其処らの人形と一緒にするんじゃないやねえ」

「まあ、そういうのなら……」

「「いざ、温泉へ！」「」

一行は硫黄の臭いを辿り温泉へと向かう
奥へと進むにつれ人が少なくなっていく

「ねえ、人通りが少なくなつて来たよ？」

「そういう所に秘湯はあるんですよ」

「でもなんか不気味だね」

「なにかありそうだな……」

この後、波田子の予感は的中することになる

どれ程歩いたのだろうか

周りには人は見当たらなくなり

錆びれた町並みが続いている

「途中で引き返せばよかつたかな……」

「今更言つたつて意味ないだろ」

「にしてもここに温泉あるんですかね？」

「さあ？」

そんなことを言っていたら霧が濃くなつていった

1m先でさえ見えない程霧が濃く身動きが取れないでいた

数分経つた頃霧が晴れ始め、周りの景色も分かるようになっていた
そこは廃墟とビルが立ち並んでいた

まるで栄華を極めた世界の果て、人類の滅亡、そんな事を連想させる場所だった

「なにこの街……誰もいないじゃない」

今まで街には少なくとも人は居たのだがここは違う

壁は崩れているため風通しがとても良さそうだ

「だけどこの先に最後のボスが居るんだよね？」

波田子は目を凝らし周りを見渡す

「ん？何か居るぞ」

波田子が指した方向には小さな赤ん坊が横断歩道を渡っていた
「なんで赤ちゃんがこんなところに居るんでしょうね？」

皆が「さあ？」と首を傾げ波田子が赤ん坊の方へ歩み寄ると
夕暮れの風景の中僅かに光る物が飛んでくる

「!？」

波田子は声を出す暇なく直撃し肉片をばら撒く
余りの衝撃にクレーターが出来ていた

「何が起きたんだぬ!？」

「光る物が飛んできたと思うのですが何でしょうか？」

その攻撃を見ることが出来たのは椿だけだったようだ

「なんなんだよもう……」

波田子は何事もなかったように赤ん坊の方に行く

「あのブス最早リアクションも取らなくなったな」

佐藤さんは香苗の腕の中で呆れていた

波田子が赤ん坊までたどり着くと波田子は静かに抱き上げる

「なんだこれ……冷たいじゃないか……」

「冷たいって赤ちゃんが？」

「ああ、既に死んでるって事だな」

波田子が椿に赤ん坊を渡そうとする
すると赤ん坊から何かが落ちる

「これは……ホツチキスの針？」

「なんでホツチキス？」

「あたいに聞くなよ」

もしかしたら分かる人もいるのかもしれない
だが会員達にはこのような事は疎かった

黒纏う 電子世界の 終焉

「死んだ赤ん坊に謎の攻撃……臭いですね」

「硫黄の臭いが取れてなかった？」

「そういう事じゃないです」

「気を付けるよ？何が起きても不思議じゃねえ」

佐藤さんはあたりを見回して警戒している

「なんかラストダンジョンみたいだね」

《その通り》

「！！」

《いやはや、大分待ったよ》

「物語的には早いかな」

『そーね』

いきなり出てきた男は彼女らも一応は見知っている顔だった

「松村真宏……コンピュータ同好会の数少ない男性でかなりの腕の

プログラマー……」

《この身体はね》

「という事は乗っ取ってるんですか」

《そうだね。一番初めに会ったし、この世界を操るには都合の良い

人物だからね》

「なるほど、やっぱりこいつがこのゲームを作ったのか」

香苗の腕から出て佐藤さんは真宏に問いかける

「お前は何のために俺たちをここへ呼んだ？」

《一つはこのゲームのエンドは雪音君に魔法を授けるため。

これは水城君が僕、いや真宏君に頼んで作ったから。

もう一つは僕、つまり乗っ取っている僕が君たちを危険分子だと

判断したから》

「危険分子……？」

《細かいことは気にしなくていいよどうせ消えるんだから

にしても水城君が居なくなってくれたのは幸いだっただなあ

彼女はこの経緯を全て知ってるし、結構手強いしさ

せつかく弱点である人物を連れてきたって言うのに無駄になっちゃったよ》

「水城に弱点なんてあるのか？」

真宏が後ろを向いて手招きをするとまたもや人がやって来た

《……》

それは布を巻いて居る人物だった

「アナタは……！」

雪音がその人物を見て驚いた

「なるほど、確かに弱点ね」

《彼を呼び出すのに苦労したんだよ？死んでる人物を出すのは難しいんだ》

「死んでいる人物で水城の弱点……」

「姐御が居たら寧ろ逆切れして手を付けられなくなると思うがな」

《あいつには申し訳ないことをした……》

手で口周辺を塞ぎ口臭が漏れないようにしている

《うわっ君口臭いなあー！》

《なんで分かる……？》

「どうでもいいのでとっととしてくれませんか？」

《ああ、スマン》

《じゃあそろそろ殺りますか》

真宏は椿、波田子に何かを投げつける

「これは!？」

椿は咄嗟に身を翻し何かを避ける

「ゴフツ!？」

波田子は身を貫かれました

波田子は貫かれた胸を押さえ、辛うじて立っていた

「あたいはいつもやられ役かよ……」

《本気ではないけど避けるとは流石だね》

「充分すごいと思いますよ銃弾を指だけでこのスピードを出せるとは」

「銃弾？」

「拳銃を使えば手順がある程度必要ですし、詰まりもします。

でも指で弾くことにより火薬も必要無しになりますからね」

《でも疲れるけどね》

「ダメじゃねえか」

布男は佐藤さん & amp ; 香苗と雪音の方へ向かう

《懐かしいな》

「そうだな、2年ぶりくらいか？」

《大体そんな感じが、水城にも会いたかったものだな》

「だがお前さんから姐御の雰囲気を感じるのは何故だ」

《それはこれの所為だろうな》

布男が背中に背負った武器を構える

「それは水城の機械重槍かぬ!？」

《そうだ。これは彼女が残した物だから》

槍を地面に突き立てる

「だから無かったのかぬ」

《それに彼女の思念を少し使ったのもあるだろうな》

心の中に残り続ける想いおそらくそれを利用されたのだろう

「でも貴方には優しさが見つからない真宏君のように別人のような感じがする」

《そうか、そうだな。分かるよな?だって本当の彼の精神はもう無い

所詮、俺は偽物だから》

「本当の正体は何なんだ？」

《勿体ない気もするがいいだろう……

の を 》

(・)(・)

それは真実だ

意識の虚無は真実だ

囚われ人は真実だ。

私達は洞窟に入った。それが真実。

なぜ死んだ赤子が横断歩道をわたったのか。
鶏にホツチキスで留められていたから。

それが真実。

それは真実。

たえずそれに留意しないといけない。

それは苦痛。それが真実。

それは快樂。それが真実。

それに戻りたい。それが真実。

戻らなければ気が狂う。それが真実。

「こいつは厄介な奴が相手だな」

「何者が知ってるの？」

「世界に存在する謎の意志

それを正確に表現することはできない

それは神かもしれないし、悪魔かも知れない

そう言われてる奴だ」

苦虫を噛みしめたような顔で呟く

「よく分からないぬ……」

「t a n a s i n n ……それが奴の一つの名前だ」

「一つの名前？」

《ま、本 名前 事は出 い な》

「聞き取り辛いんだけど」

《 気にするな 》

巻いた布の隙間から黒い点が泡のように吹き出ており、彼の周りを包んでおり

手に持った槍にも黒い点は纏わりつき、さらに禍々しさが強調されている

「倒す方法は？」

「ない」

「じゃあどうやって倒すんだぬ!？」

「あの肉体を潰せば何とかなるかもしれないな」

「出来るかな……」

《な を して るんだ ？》

槍を地面から抜き3人へと突進する

決して早くはないが高速回転する槍と渦巻く黒点が恐怖を煽る

「うわっ!？」

気付いた3人は急いで散り散りに避けた

「あれに当たると即死しそうだぬ

佐藤さん怖いぬ……」

香苗はいつも佐藤さんのそばにいるがこの時は離れてしまっていた

「お嬢ちゃん!早くこっちに来るんだ!」

《 …… (・) …… 》

彼がこれを見逃すはずは無かった

香苗の方へ向き槍を向ける

ダッ！！

彼は走りだし対象を貫かんとする

「キヤーーー！！」

「くそつ！！嬢ちゃんを殺されてたまるか！！」

「力が欲しいのでしょうか？」

その時、時が止まった

椿の仕業ではない。現に佐藤さんは動ける

どこからか聞こえる声

私ではない

かなり昔に聞いたような気がする

だがつい最近聞いた声の様な気もする

「力が欲しいのですね？」

「ああ、欲しい」

「なら貴方の本来の力を呼び出すしかありません」

「俺にそんな力があるのか？」

「元は私も貴方も1つだった。いや、違いますね

私と貴方は1度死んでいます。

私たちを生き返らせるため、貴方と私は母に力と魂の一部を貰った

姉さんは貴方を作り変えその力を制限し私に渡した

そして私は貴方にそれを返しました。

貴方はもう苦しむ必要はないのですよ

私達は家族です。大切なものが消える苦しみはみんな知っています

す

声の主の姿は見えずどこから聞こえているか分からない

「姉さん？俺を作ったってことはあんたは姐御の妹なのか？」

それに、俺は嬢ちゃんの為に作られたんじゃないのか？」

「姉さん……嘘を憑きましたね

貴方は本来は1匹のウサギだったんですよ

私は元は獣人でしたけどね

とにかく、貴方の飼い主は姉さんでした
でも私と貴方は散歩途中に交通事故に遭った
即死でした。私は何とか原型を留めてましたが、貴方は皮を残し
て潰れていました

そこで姉が私の危険を感じ取り、母を連れて助けに来ました
母は自分の命を削り生命の源、魔力みたいな物を私たちにくれま
した

肉体に関しては姉さんが直してくれました
私は姉さんの血と肉体によって、貴方は姉の皮膚と毛髪で再生さ
れました

だから貴方は姉にしか直せないんです
『その母親は何者なんだ？』

『何者なんでしょうね？とりあえず魔族ってことは知っているん
ですが……』

小さいころ拾われたってことは憶えているんですけどね。
最初に拾われた姉さんも詳しくは知らないと思います』

「姐御も知らないか……」

『その母ももう居ません。
私達たちを残して何処かへ消えました』

話は長くなりましたが、母が残した魔族の力の欠片を使ってくだ
さい

きつとあなたならどうにかできるはずですよ』

「ああ、常ちゃんを助け出してこのゲームを終わらせる……！」

『その調子です』
声の主は小さく笑い消えて行った

時も動き始め槍が香苗に当たろうかと言つ瞬間……！

「そこまでだ」

香苗の前に現れた人形、いや人物は高速回転する槍を蹴り飛ばす
「嬢ちゃんに槍を向けたことを後悔させてやるぜ」

兎の人形だった体格は人のようになり、紳士服を纏い帽子を浅く被っている

では顔はどうなっているのかと言うと……

「ウサギさんだぬ」

ウサギでした

しかし佐藤さんの象徴であるダンディさは一切として衰えては無く寧ろ溢れ出る程であった

《しそだな》

「楽しめるかどうかお前さんしだいだぜ？」

「佐藤さん何言ってるのか分かるんだ……」

「細けえことはいいんだよ！」

《ハハにな!!》

布男は足払いを仕掛ける

勿論そんな攻撃が佐藤さんに通じる訳もなく、逆に足を払われてしまった

《くつ》

「アンタが纏っているその黒点、本来ならば触れたものを飲み込むんだろう？」

だが俺には効かないらしいな

《何故何だ?》

「知らないな。姐御の所為なのか、母とやらの所為なのか」

《マか……の所な》

「名前を知っているのか!？」

布男は体制を立て直し佐藤さんを見つめる

《会っがらなこ体が知た》

「流石彼氏だっただけあるな」

「え?水城のお母さんもしかして凄い人なの!？」

「詳しい話は姐御に聞いてくれ」

《をてるか?》

彼も本気を出さねば勝てない事を察したのか

全力で佐藤さんへ攻撃を仕掛けた

「な？不意打ちは卑怯だな！」

佐藤さんも完全には避けることが出来なかった
本来なら掠った程度でも危ないのだが今の佐藤さんにはあまり効いてい無様だ

《 チート …… 》

「じゃあこつちの番だな」

人のようになつた拳が布男の腹に突き刺さる

《ぐふっ……》

体から出てくるのは血ではなく黒点

死人に血はすでに無い

体から溢れる様に噴出していく

《にしても早すぎだろう……》

「グダグダやるのもつまらないしな」

「ええい！」

男の背後から雪音が刀を振り翳す

背中がパツクリと開き黒点が漏れ出ていき

体全体に巻かれていた布が切れたとにより素肌が露わになっていく
生気のない色白の肌が見える

《ふざけるな！こんな終わりがあってたまるか！》

「もういいだろう。10カ月間の停止に終わりを告げる時だ」

黒点の噴き出す量も次第に減っていき

最後には出なくなっていた

《せめてあいつに会いたかったな……》

今まで顔を晒さないように巻いていた布が取れる

「その顔……！」

《醜いだろう？俺は死んでから一切として時が進んでいない。この顔も戻らなかつた

だから今まで隠していた。絶対にあいつにこんな顔見せられない》
彼の死因は何か？

彼女から話される日は来るのか？

《一つ言わなきゃならない事がある

俺はこの力を借りているに過ぎない

本体……いや走狗にすら及ばない位だ

こいつらに決して触れるな。それだけ言っておく……》

男の肉体は灰となり風化した骨だけが残る

「佐藤さあああぁん！！」

佐藤さんの後ろで一部始終を眺めていた香苗は泣きながら抱きついた

「嬢ちゃんもう大丈夫だ」

佐藤さんは大きな手で香苗の頭を撫でて微笑む

いつもは体格の差で撫でられてばかりだったので今回ばかりはちょっと嬉しい気分

一方椿と波田子は……

ドンパチャっていたがそれほど面白い展開もなかった

布男が倒されるとほぼ同時に倒れ気を失っていた

「もしかしたら操ってた奴が引いたのかな」

「多分そうでしょうね」

「あのさ、このゲームのラスボスって誰だったの？」

「あの人たちじゃないかぬ？」

「だが彼奴等は操られていたんだぜ？」

会員達が話し合っていると廃墟の奥から誰かが顔を出す

「もう終わりましたの……？」

怖い物を見たような目で憐華がこちらを見ている

「もう終わったよ」

「何で居るんだぬ？」

「多分アイツがラスボス役なんだろ」

皆で手招きをして憐華を呼ぶ

「なんでこんなところに居るんだ？」

「えっと、水城に「ラスボス役やってくれたらいい物をあげるわ」
って言われたからやりましたの」

またアイツか。

「んで、何をくれるんだ？」

「「先払いよ」って言ってこれをくれましたわ」

憐華が見せたものは一丁の銃だった

銃自体は普通であつたが銃に施された装飾がやたらと煌びやかだった

「それで負けたらこれを渡せって……」

「じゃあその銃がラスボスを倒したっていう証拠になるのかな」

「私わたくしはもう疲れましたわ。これをあげるからお好きになさい」

「なんか倒したって言う感じがしないな……」

「こっちは疲れてんのに無理させんなよ」

憐華が雪音に銃を手渡す

「結構重たいんだね」

「銃はそんなものですわよ」

雪音達はクリアアイテムを手に入れたが何も変化が無い

「あれ？クリアじゃないの？」

「何かしないと無理なのかもな」

銃を振ってみたり叩いてみたりしたが全く反応が無い

雪音の馬鹿力でも壊れないとはかなり丈夫である

すると今さっきまで気を失っていた真宏が目を覚ました

「う、うゝん。ここは？」

「あ、起きたぬ」

真宏は辛そうに立ち上がる

「イテテ……なんでこんなに筋肉痛がするんだろ？」

「あーそれはですねー」

会員達はこの経緯を話した
なぜ真宏がここにいるのか
なぜ筋肉痛がするのか

どうやったたら元の世界へ帰れるか

「成程、分かったよ。ちよっとその銃貸して」
銃を手渡すとガクンと脚が折れた

「あぶないあぶない……えっとこれはこうで……」

何やら色んな事をしているが何をやっているのか全く不明であったが
とりあえず最後にストツパーっぽいのを外しているのは見えた

「これで誰も居ない所に撃ってみればいい」

ほい。と雪音に銃を返す

「これでいいのね？」

ポウンツツ！！という鈍い音を出して一面に煙を吐き出した

「ケホツケホツまたあ？」

今回は霧ではなく煙だがどちらにせよすぐ近くすら見えない程の濃
さだった

煙が消えると元の場所に……戻っていなかった

だが一つの変化があった。それは目の前にシヨタがいる

大き目のアイテムバックを肩にかけ、白髪でボロボロとなった服を
ガムテープで繋ぎ合わせている

顔はと言うと、半分の顔が潰れているという見るも無残な姿である

「まさかこの子アイツとか言わないでしょうね？」

シヨタはアイテムバックからパソコンのディスプレイを引っ張り出
してケーブルを口に啜える

《チガウ ぼくは 新キャラ》

ディスプレイに文字が表示される

「自分で新キャラとか言っちゃったよ！」

《ハナシの ツゴウ上 こうするしか なかった》

「さらにメタかよ」

《とりあえず ゲンジツヘカエる ミチを開く》

「この子を出現させるために必要だったんですね!!」

「でもなんだか顔が痛そうで可哀想だね」

「……ちよつと待ってる」

佐藤さんは布男が残した黒く染まった布を子供に巻いてやる

《有り がと》

「これで痛くないよな」

「包帯つ子つて萌えるぬ!」

「香苗の趣味はよく分からないわね」

《じゃあ 開く よ?》

子供がディスプレイをしまい、今度は怪しげな機械を出して赤いスイッチを《ぼちツとな》

機械からゴウンゴウンと今にも壊れそうな音が鳴る

暫くすると機械は小爆発を起こしバラバラになってしまった

「失敗か?」

波田子が心配そうに子供を見つめるが子供はディスプレイを再び出し

《これで 開いた》

と表示させる

すると機械があつた所から突如穴が開き

全員を飲み込むほど大きくなる

「キヤーー!」

波田子のみ奇声を上げて落ちてった

《正ジキ きもちわるいです》

「」

絶句した

10秒ほど自由落下した後地面にぶつかる感触がした

最も、それを一番に味わったのは波田子であるが

波田子、真宏、憐華、雪音の順に積み重なるように落ちたからである
で、香苗たちはいうと……

「嬢ちゃん大丈夫かい？」

「佐藤さん……」

《助かり ました》

2人を抱え綺麗に着地した

「これ位の着地位はできないといけませんよ？」

椿は持ち前の身体能力で難なく着地

「戻って……これたんだな」

潰れかけている波田子は掠れるような声で言葉を発する

「全く、辛い目に遭いましたわ！！」

「それよりも早く降りてほしいなあ」

「あ、ゴメン」

雪音と憐華はそれほど重たくは無いが真宏にとってはそれでも重い
波田子に比べればまだマシなのだが

「佐藤さんその大きな腕で抱きしめて欲しいぬー」

「良いぜ嬢ちゃん」

佐藤さんが香苗を抱きしめ

これから二人の世界が始まるのかと思いきや、

PON！！という軽い音が鳴ると佐藤さんは元のサイズに戻ってし
まった

「ん？時間切れか？」

サイズが元に戻ったのでいつもと同じように香苗の腕に佐藤さんが
収まるという形になった

「うう……最後に佐藤さんの腕に包まれたかったぬ……」
いつも通りの同好会が戻ってきた

新しい仲間も増えた

さてコンピュータ同好会はこれからどうなっていくのか

彼女たちはこれからもハチャメチャな生活が始まる事だろう

「良かったわねこれで2週目が出来るわよ？」

安心する会員達に微笑みながら声を掛ける水城がいた

お
わ
り

黒纏う 電子世界の 終焉（後書き）

これにてこの話は終わりです

本編はまたいつか更新するかもしれませんが

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9850x/>

会員達のゲーム日誌

2012年1月6日22時48分発行